

所属	心理学研究科 臨床心理学専攻 修士課程	修了年度	平成 27 年度
氏名	岩野 佑紀	指導教員 (主査)	渡邊 勉

論文題目	ホスピスボランティアにおける 活動満足度と死生観およびバーンアウトの関連の検討
------	--

本文概要	
<p>【問題と目的】 日本ホスピス緩和ケア協会によるホスピス緩和ケアの基準では、ボランティアはチームの一員であり、大切なケア提供者であるとされている。Brown (2011) は、ボランティアの死別体験やその家族への働きかけは、不安、神経過敏、疲労や不眠などのストレス症状を引き起こしているという。その一方で、ボランティアは悲観や困難を感じるものの、死生観や活動のやりがいを得ることができ、結果としてストレスが軽減するとの報告 (Claxton-Oldfield & Claxton-Oldfield, 2007) もあり、継続に関連する要因について検討することは急務である。本研究の目的は、ホスピスボランティアにおける活動満足度と死生観のバーンアウトの関連を明らかにし、バーンアウトせず継続して活動を行うためには何が必要となるのか推察する。</p> <p>【研究方法】 調査対象：16 施設，89 部 (回収率 59.7%) の質問紙を回収し，すべての回答を分析対象とした。 調査期間：2015 年 9 月－11 月 調査方法：無記名式質問紙 質問紙の構成：①フェイスシート (性別，年齢，活動経験年数，活動内容等) ②ボランティア活動満足度 (援助成果測定尺度・ボランティア活動動機測定尺度) (妹尾・高木，2003)：5 件法，27 項目 ③臨老式死生観尺度 (平井・坂口・安部・森川・柏木，2000)：7 件法，27 項目 ④日本語版バーンアウト尺度 (久保・田尾，1992)：5 件法，17 項目 ⑤自由記述 (ボランティア活動を通してどのようなことを得たかについて) 倫理事項：目白大学人及び動物を対象とする研究に係る倫理審査委員会に書類を提出し，審査非該当の結果を得た。</p> <p>【結果と考察】 分散分析の結果，バーンアウト尺度の“個人的達成感”において“活動満足度合計”と臨老式死生観尺度の“死への恐怖・不安”に有意な交互作用 ($F(1,62) = 5.52, p < .05$) が認められた。これはボランティアの持つ高い活動満足度，死への不安や恐怖の低さがバーンアウトの発生を抑える要因になりうるということである。患者と密接に関わる活動の特徴から，ボランティアは死に対する不安や恐怖を，自分に置き換えて考えたり，また患者の死に直面することで，それらがさらに強くなることもあるだろう。そのため，志村 (2008) が報告した，ボランティアコーディネーターやボランティア代表による事前面接だけではなく，ボランティアが抱えている不安感や恐怖感について傾聴し，ボランティアの適性を考慮して活動内容を変更することも必要となるかもしれない。</p> <p>さらに，“個人的達成感”において“活動満足度合計”と臨老式死生観尺度の“人生における目的意識”に有意な交互作用 ($F(1,64) = 6.27, p < .05$) が認められた。つまり，自分自身のこれからの人生の目的意識や高い活動満足度が，バーンアウトの発生を抑制させる可能性があるということである。ボランティアという独自性，専門性の高いボランティアを選択し，実際に継続した活動を行うことは，ボランティア活動に対する明確な目的意識を意味している。それは自由記述の，“ボランティア活動を通して，自分自身の生きがいについて考えることが出来た”などの記述から，人生における目的意識がさらに洗練・進化し，積極的にボランティア活動に向かっている姿勢が窺えるからである。ボランティアへの目的意識を保つためにも，ボランティアに向けた研修の機会を設けたり，ホスピス・緩和ケアにおいてボランティアとしての価値を強めることが必要となるだろう。</p> <p>【主要な引用文献】 Brown, M. V. (2011). The Stresses of Hospice Volunteer Work. <i>American Journal of Hospice & Palliative Medicine</i>, 28, 188-192.</p>	